

1. ツツジの年内開花に成功

撮影：昭和39年12月22日



つつじの花は、促成しても年内には咲かないものとされていた。県農業試験場においても、伊東市田代で3年間試験を行った結果、年内には開花不可能との結論を出した。

翌年、小生の研究した超促成開花計画を持ち県農業試験場に行き説明、試験場でも成功すると判断し、県、町の共同試験を実施した。その結果、全国初の12月開花に成功した。

この写真は、翌年小生のビニール・ハウス内にて12月15日に開花させたものである。

2. 11人の十里木分校

撮影：昭和31年7月6日



この写真は、今から27年前の須山小学校十里木分校の懐かしい風景である。

11人の児童が下校するスナップ・ブランコと鉄棒の体育授業、写真の主役達は今では中堅社会人として活躍しており、その子ども達もちょうど写真の年齢位で、元気に通学していることでしょう。

この十里木分校は、昭和41年3月31日に閉校となり須山小学校に統合され、今ではもうありません。

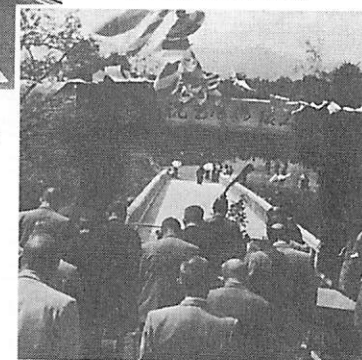
3. 愛鷹橋完成

撮影：昭和34年5月



▲昭和55年12月
竣工の「新愛鷹橋」

▼当時の竣工式



台風と豪雨災害により、愛鷹橋は危険にさらされていた。水窪区民は一丸となって国に陳情を続けた。

故遠藤三郎代議士の御協力を得て、国の補助による架替え工事が承認され、念願かなった竣工式典を迎えたのである。当日は、故遠藤代議士も出席された。

4. 田 植

撮影：昭和28年 6月22日



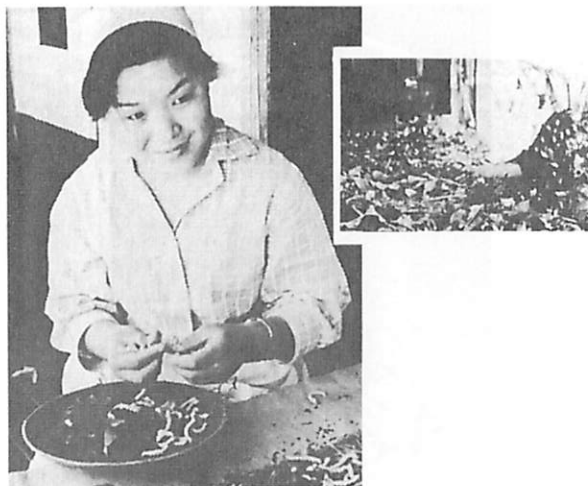
あの頃の農家は、田植の季節が来ると猫の手も借りたいほどの忙しさで、大麦、小麦の取り入れから始まり、田すき、堆肥の運搬、撒布、クロ刈り、畦塗り、荒代、苗取り、苗くばり等々と、田植前夜は水配のため眠る時間もないほどであった。

素足で田の中に入るため麦の刈株で生傷の絶え間がない。足の速い馬では、鼻取りも代かきもどろんこ、どろんこを飛ばして早乙女さんに叱られたものです。

こうした風景も、今は昔の懐かしい思い出、明るい唄声が聞こえて来るような一幅の風物詩を見る想いがします。

5. おかいこさん

撮影：昭和29年 7月



今から50年～60年以前には、裾野でも養蚕が盛んに行われていました。戦中、戦後の食糧難にぶつかり、ひたすら食糧増産のため桑園はつぶされて、養蚕は姿を消してしまいました。

子どもの頃、「まゆかき」（まゆを取り出すこと）の手伝いをする時、テッポウ玉（あめ）がもらえたものです。当時の農家にとって、おかいこさんと崇がめられていました。

今でも、二本松にカネボウシルク蚕種製造所があります。その関係で蚕種用の養蚕が富岡方面の一部で行われていたが、これも姿を消してしまったのではないだろうか。

6. 大きなカヤ葺き屋根の家

撮影：昭和29年 7月



麗峰富士の偉容、広い高原を背にして大きくどっしりと構えたカヤ葺き屋根の家。雨にも風にもゆるぎなく移り来た歴史を年輪に刻み、幾星霜を経た面影は、大きな風景をも圧して巨木さえも小さく見えます。

さあ、これは何処の風景だったでしょう。今は市内でもカヤ葺き屋根の家は数えるほどしか見られないことと思います。

残念ながらこの写真の家も今は見ることはできません。ありし日の十里木を偲ぶ思い出の写真となりました。

7. パイスケ

撮影：昭和29年7月



リヤカーに積まれて出荷を待つ、これは何と言うもので何に使用するのか、戦後生まれの人達にはなじみの少ないものと思います。

これはパイスケと呼ばれ運搬具の一つで土木工事などでは土の運搬用として肩にかついで使ったものです。箱根山には竹が多く生え箱根竹と呼ばれて、この竹で竹ごうりやパイスケを製造（手編み）して各方面へ出荷しました。茶畑あたりはこの産地として知られていました。

戦後はあらゆる面で機械化が進み、家内工業的な手労働による製品は姿を消していきましたが、パイスケも当時をしのばせるものの一つです。

8. モンペ姿

撮影：昭和29年7月



戦後から今日にいたる衣服、ことにご婦人方の衣類の流行の推移は、目を見張るものがあります。戦中の服装と言え、男子は国民服、女子はモンペと決まっていたようなものでした。

戦後、化学繊維の開発によって衣類の様相が変わり、有名デザイナーが生まれ、今やファッション界は花盛りです。

このような時に写真のような戦後の一時代を思い出します。モンペ姿にスゲ笠、清楚なこの装いは、くっつくのない乙女の笑顔に清純むくな気品さえ漂わせて、まさに飾りなき最高の衣装でした。

9. ぶどう巨峰

撮影：昭和29年8月



ぶどうの巨峰と言え、露地ぶどうの王として知らない人はない程になっております。この巨峰ぶどうが静岡県原産である事を知っている人は少ないようです。

巨峰は、田方郡中伊豆町上白岩の大井上静一先生が、多年の研究努力により作り出された品種です。市内（当時裾野町）の先進農家の方達も、さっそく巨峰を導入して栽培しました。

甘味も良く、品質良好ですこぶる評判が良かったのですが、巨峰の栽培は難点が多く、非常に労力を要したため、人手不足と気象的条件が重なり、ついに栽培を断念するに至りました。今では1～2戸の農家が栽培を続けているものと思います。

10. 大畑橋の流失

撮影：昭和31年9月



大畑橋、今は鉄筋コンクリートの近代橋ですが、この頃は歴史保存的な木橋で、映画の時代劇撮影に利用されたことも度々あったものです。

昭和31年9月の台風で、黄瀬川が増水し、大畑橋は流失の危険にさらされました。この日の夕刻、黄瀬川が増水はしだいに高まりました。澱粉工場へ浸水したため、消防団が出動していましたが、大畑橋が流失の危険にさらされているので、厳重注意の知らせが出されました。

この写真は当日の午後5時頃撮影したものです。ものすごい風と雨で、この程度の撮影しかできませんでした。その夜、午後8時頃この大畑橋はついに流失してしまいました。

11. 牛とともに

撮影：昭和29年9月



古来から、農家の動力の主たるものは馬でした。どこの農家にも馬一頭は必ずと言ってよい程飼われていました。

戦時中は農家の馬も軍に徴用されて飼養頭数は減少してゆきました。戦後馬に代わって農耕用に牛が飼われるようになり、馬車運搬等の専門者は別として普通農家は牛を飼養して農耕、運搬に使用していました。

「オーイ、牛にエサをくれたかヨ」「ハイ……、もうすぐよ、待っててね」、牛も家族の大事な一員として、こんな会話が聞こえてくるような往時を偲ばせる一場面です。

12. 十里木の富士山

撮影：昭和30年10月



美辞麗句を並べても言い表わせないほど秀麗な富士山の全容は、広大な原野に裾をひき、さまざまな景観を織りなして、眺める人々の目を楽しませてくれます。

このような富士山の姿も眺める場所によって大きな変化があります。三国峠の富士、河口湖の富士、朝霧高原の富士、等々どこから眺める富士山もみなそれぞれの景観ではありますが、この十里木の富士山こそ本当に美しい富士山で、他所では見られない自慢の一つでした。

この景観も、開発によって今は違ったものとなりました。

13. 稲 こ き

撮影：昭和30年10月



戦後の食糧増産の掛け声に乗って、農家の人達は朝早くから夕方暗くなるまで頑張りました。

今と違って全部の農作業が肉体労働を伴うものでしたので、稲こきも朝から夕方まで脱穀機を踏み続けると、翌日の朝は足が上らないほどでした。

今は専業農家も少なくなり、兼業農家が多いので農作業も機械にたよることになり、稲刈りからからうすまで機械作業となりました。

あの頃は大変でしたが、扇風機や箕やむしろも大切な農作業の器具であり、懐かしい想いにかられます。

14. 炭 俵 編 み

撮影：昭和30年11月



今は燃料といえば、ガソリン、灯油、ガス、電力等で薪炭を使用している家庭はほとんど見られません。昔は山つきの地区では、炭焼きが盛んに行われており、裾野でも須山方面は木炭の産地として有名でした。

木炭は、焼き上がると俵に詰めますが、この炭俵はすべて手編みで主としてご婦人達の仕事でした。秋になると大野原に出て材料のカヤ刈りをするのですが、この仕事もまた大変だったそうです。

昔の人は皆、大変な仕事を手作業でやり遂げたのですね、今はもう見られない作業風物詩の一つです。

15. 木の葉かき

撮影：昭和28年11月



この頃の農家では、秋の収穫がすみ、麦の種子蒔きが終わると、木の葉かきが始まります。この木の葉は、サツマグラ（甘藷の苗床）や春野菜の苗床の壊熱材料として、また苗床終了後の堆肥として欠くことのできないものでした。山林の雑草を刈り、木の葉とともに丁寧にかき集め束にして馬力に乗せて運搬し、庭へ山積みにするのです。

馬力とは馬に引かせる荷車のことで、この馬力が農家最大の運搬車でした。毎日馬力に木の葉を山ほど積んで、正月前にどれだけ沢山積み上げるか隣り近所で競い合ったものです。この風物詩も今では見られません。

16. 沢庵大根

撮影：昭和30年12月

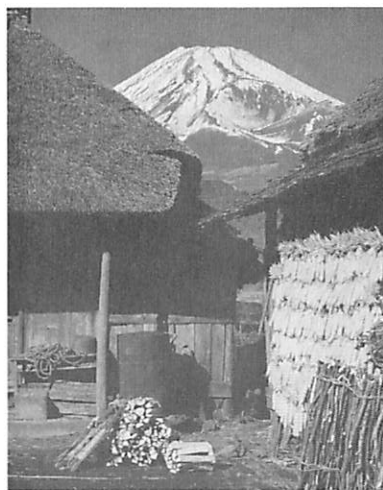


木枯らしが吹き始めると、沢庵漬用大根の収穫が始まりますがこの農作業は昔も今も変わりなく行われています。しかし、現在は沢庵大根の栽培も非常に少なくなり、せいぜい農家の自家用程度の栽培にすぎません。

沢山栽培された頃は、どこの農家でも1週間くらい収穫が続きました。大根の栽培は山畑に限られましたので、大根を洗う水を山畑まで上げる仕事も一苦労だったのです。木枯らしの中の大根洗いは、たちまち手がヒビ割れてしまうのです。のどかな風物詩に見えても、現実には楽な作業ではなかったのです。

17. タキギ作り

撮影：昭和29年12月



瑞麗な富士山を背景に萱葺屋根の母屋と物置離れ屋。板壁にぎっしり掛けられたトウモロコシ。冬の日差しを浴びながら、庭でタキギ作りをしている農家の主婦。いかにものんびりした風景に見えますが、この頃の燃料はすべて薪炭だったので年間にはかなり多量のタキギを必要としたわけです。ことに須山十里木方面は寒冷地のためなお多くを必要としたわけで、タキギ作りも重要な作業であったわけです。今は何処を歩いてもこのような場面は見られなくなりました。

18. 富士の裾野で酪農

撮影：昭和29年1月

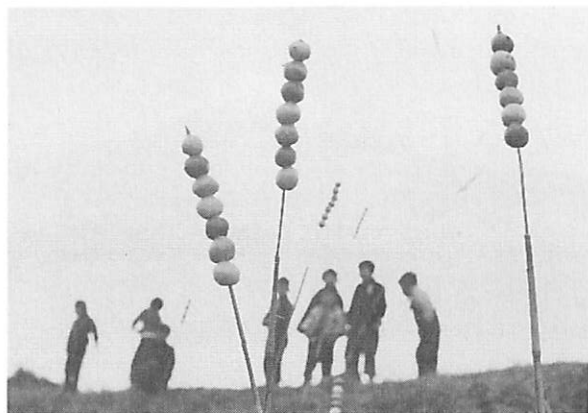


厳然としてそびえる麗峰富士悠久変わらぬその偉容は、新春を迎えた私達に勇気と希望を湧き立たせてくれます。裾に広がる見渡す限りの枯野原は、冬の厳しさと若草の萌え出る春を連想させます。

今から30年前、酪農を志した青年がこの地を借りて乳牛の放牧を始めました。牛舎も、居住する小屋もすべて自分の手で作り、ランプ生活を送りながら辛苦に堪えて酪農一筋に命をかけてきました。今は功成り、名とげて社会のために尽力しておりますが、ランプ生活をしていたあの頃が懐かしく思い出されて新春を思い新たにします。

19. どんどん焼き

撮影：昭和33年1月



1月14日はどんどん焼きの行事が行われました。
このどんどん焼きは、変わりなく続いています、これを迎える子ども達には時代を反映した移り変わりがうかがえます。
夕方の冬陽は弱く、底冷えのする寒さにもめげず、喜々としてどんどん焼きに向かう子ども達の表情が、いかにもうれしそうだったのが思い出されます。
この子ども達も今は父母となっており、かわいい子どものためにダンゴを作ってどんどん焼きに送り出したことでしょう。

20. 青春の乙女

撮影：昭和30年2月



小春日和の静かな陽光に、若い二人の顔はいきいきと輝いて見えます。戦中の不自由な時代を送った子ども達も、戦後はこんなに良き青春が待っていました。
仕事の合間の一ぶく、話はずみずみ。カスリのモンペ染めに手っ甲、姉さんかぶりの手ぬぐいも板について、本当に若々しい娘達ですね。
さあ、いいかげんで仕事にかからないと、もうすぐお昼になっちゃいますよ。

21. 春がきた

撮影：昭和29年3月



戦後ようやくにして衣食住が好転してきた時代です。子ども達や娘さんの服装の移り変わりがうかがえると思います。
ここは富士農園の茶園で、道の両側はお茶畑でした。製茶工場も古くからあったのですが、今は不二聖心女子学院の敷地となっています。
春になると、若い人達のピクニックや小学校の子ども達の遠足でにぎわったものです。畑仕事の姉ちゃんをお迎えに、今は見られないこの風景も、懐かしい思い出の一つです。